



Title	保育者及び教員養成系大学の学生に対するピアノを用いた指導：小学校音楽科歌唱教材の簡易伴奏譜活用のあり方
Author(s)	田中，宏明
Citation	高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習，23，37-42
Issue Date	2016-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.23.37
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62241
Type	departmental bulletin paper
File Information	2304.pdf



Method of teaching child care workers and students at colleges of education using simplified piano scores for elementary school music course song teaching materials

Hiroaki Tanaka*

Fuji Women's University

保育者及び教員養成系大学の学生に対する ピアノを用いた指導法 —小学校音楽科歌唱教材の簡易伴奏譜活用のあり方—

田中 宏明**

藤女子大学

Abstract — In the usual music classes in elementary schools, only the melody of a song and lyrics are presented. Because there is no score for piano accompaniment, some commercially available scores are used in teacher-training colleges. However, they are too difficult for beginner students to be able to play in the short term. Therefore I developed some simplified piano scores that are easier to play without spoiling the musical expression. All four of the beginners using this material were able to play one of the scores after only two lessons.

(Accepted on 13 January, 2016)

はじめに

本稿では、保育系大学や教員養成系大学に入学後、カリキュラム上、初めてピアノを学ぶ学生の中で、特に初心者に焦点を当て、習熟度が低くても演奏を平易にする工夫を検証する。また、小学校学習指導要領に関連付けられた、簡易楽譜作成の際の留意点や活用法についても明らかにしたい。

小学校音楽科歌唱共通教材は、2015年8月現在、各学年4曲ずつ、計24曲ある。これらの歌唱教材の楽譜について、音楽の教科書では歌詞と旋律がト音譜表上に記載されているのみで、大譜表による伴奏譜は付加されていない。そのため教員養成系大学での授業や教員採用試験では、ピアノで伴奏ができるよう、伴奏付きの楽譜を用意する必要がある。楽譜は主に教育芸術社の「小学校音楽用指導書」をは

*) Correspondence: Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, Ishikari-shi, 061-3204, Japan
E-mail: zklavier88@gmail.com

**) 連絡先：061-3204 石狩市花川南4条5丁目 藤女子大学人間生活学部

じめ、「小学校教員養成課程用 新訂音楽科教育法」など、市販されている楽譜集を頼りに演奏されていることが多いであろう。しかしピアノ上級者にとっては特に問題はないにしても、初・中級者にとっては演奏困難な楽譜が多いのも事実である。そのため初・中級者にとって演奏しやすい簡易な伴奏譜が必要となる。

河西は簡易伴奏の必要性について次のように述べている。「和声的な支えができることによって、メロディーの美しさを引き立たせ、歌の学習を音楽的で楽しいものにすることができる。このように、簡易伴奏は、歌唱指導において欠かせない効果的な技法である。」(河西ほか 2005)。

1. ピアノ初心者への演奏法の工夫

一般に、教員養成系大学における入学試験ではピアノ実技を課さない。そのため、大学入学後に初めてピアノを学習する学生が少なからず存在する。しかしながら、卒業時の小学校教員採用試験では小学校音楽科歌唱共通教材をピアノ伴奏で演奏しなければならないため、受験に対応しうる水準に達するよう、在学期間中の限られた時間でピアノの演奏技術

を身につけさせなくてはならない。教員養成課程は学ぶ内容が大変多く、また練習する楽器を確保する問題など、ピアノ練習に多くの時間を割くことは大変な労力であろう。そこでピアノ初心者にとって少ない練習時間で「演奏を平易にする工夫」が必要となる。また、演奏を平易にする際であっても、原曲が持つ抒情的な要素や正しい和声進行などの「音楽的内容」を最低限維持していなくてはならない。つまり音楽的に正しい簡易楽譜による伴奏法が重要である。これからこの2点を柱に論旨を進めていく。

1.1. 演奏を困難にさせる要素の分析

音楽科歌唱共通教材の中から第1学年共通教材「うみ」(文部省唱歌 林柳波作詞・井上武士作曲)を例にとり、現在一般的に教育現場で使用されている楽譜をここに示す。

通常使用されている楽譜と簡易楽譜の比較を実際に検証するため、筆者は2015年7月、北海道石狩管内にある大学にてピアノの授業を受講している学生に4回の授業期間で上記の楽譜を演奏させてみた。対象学生数は11名で、その演奏レベルの内訳は初心者4名、中級者4名、上級者3名である。

上級者は第1回目のレッスン時で全く問題なく演

図譜例 1. 第1学年共通教材「うみ」 教師用指導書より

1. う み は ひ ろ い な お お き い な
2. う み は お お な み あ お い な み て
3. う み に お お ね を う か ぼ せ て

つ き が の ぼ る し ひ が ず む
ゆ い け て ど こ ま い で な つ ぐ の く や く らに

奏できた。中級者は第1回から2回目のレッスンにかけて概ね演奏できたが、第6小節の右手の動きに困難が伴う学生が多かった。初心者4名のうち3名は、第2小節および第3小節の右手重音が上手く弾けず、また全員が左右の手のリズムも合わせられず、4回にわたるレッスン期間内で完奏するのが困難であった。

では初心者にとって何故この楽譜では演奏が困難であったのかを次項より検証する。

1.2. 演奏を平易にする工夫

指導書に書かれた楽譜が演奏困難な場合、演奏が平易になるように工夫する必要がある。ではピアノ初心者にとって演奏を平易にする工夫とは何であろうか。これについて以下の3項目による工夫が考えられる。

- ① 1フレーズ1ポジション。ポジション移動はブレスや休符で行う
- ② 右手1の指（親指）、左手5の指（小指）の位置を確定する
- ③ 伴奏部分は順次進行を基本とし、跳躍進行をできるだけ避ける

この3項目は、後述する簡易楽譜作成のための基本的概念としても考えられる。まずピアノの鍵盤に手を置く。右手の場合、例えば「ドレミファソ」（CDEFGの各音）の各鍵盤に1（親）指・2（人）指・3（中）指・4（薬）指・5（小）指の各指をのせて、ポジションを固定したまま、指を動かすのは容易であろう。これは「レミファ[#] ソラ」「ファソラシ^bド」のような場合でも同様である。

「親指は他の指と比べて動きが鈍いが、物をつかむためには欠かせない指であり、この指の位置を正

しく決めることにより、安定したタッチを得ることができる」（新海・田中 2015）。すなわち楽譜に手の位置を決める目印となる指番号を各フレーズごとに記すことによって、安定的な演奏につながる。

このように運指の有効範囲、変更のタイミング等による工夫は演奏を平易にする重要な要素である。（なお上記③については別項にて後述する。）

では次に第1学年共通教材「うみ」の単旋律を用いて、右手のポジション移動について述べる。

この楽曲は、2小節ごとに1ポジションで演奏できるように書かれている。また音域も順にE音→B音、D→A、G→D、D→Aのようにすべて5度音程以内の範囲でまとまっている。中級程度の学習者が演奏する際は寄せ指や指越えなどの運指を用いて演奏するが、初心者はここで躓くことが多い。そこで、2小節ごとの4グループとして楽曲をとらえ、通常は1の指が連続することはあまりないが、フレーズごとにポジション移動することで、音楽的に不自然にならず、また演奏しやすくなる。

このようにこの譜例では先に挙げた3項目中、右手に於ける①②の工夫が含まれているのである。

2. 簡易楽譜による伴奏法

次に、左手の奏法について考察する。これは前項の、

- ③伴奏部分は順次進行を基本とし、跳躍進行をできるだけ避ける、
- に該当する。

ピアノ学習初心者にとって弾きやすい伴奏法は、いうまでもなく必要最小限の動きが理想である。右手が主に旋律を担当するのに対して、普段は複雑な動きをする機会の少ない左手は伴奏（和声）を担当

図譜例 2. 第1学年共通教材「うみ」



することがほとんどである。

河西は簡易伴奏法について、内容的に次の二つに分けられると述べている（河西ほか 2005）

基本伴奏法……伴奏の元楽譜を用い、より簡単に、しかも音楽的な本質を損なうことなく直して弾く方法。

コード伴奏法……曲に付いている和音をコードネーム化し、それによって平易な伴奏をする方法。

コード伴奏法については、和音の跳躍を避けるために転回形和音を使用しなくてはならない。これは初心者にとって演奏技術だけでなく、和声進行上第3音や導音の重複を避ける方法など理解すべき項目が多いため、本稿では上記の基本伴奏法について論旨を進めていく。

ここで、先出した譜例「うみ」の簡易伴奏譜を例示する。

へ音譜表（左手演奏部分）に着目しよう。前項1で述べた、

①1フレーズ1ポジション。ポジション移動は休符で行う。

この楽譜ではすべてG音-D音の音域で書かれている。ポジション移動は第4小節1拍目の4分休符で可能であるが、この楽譜に関しては、ポジション

移動の必要がない。

②の左手5の指については、G音で確定できる。

③伴奏部分は跳躍進行をできるだけ避ける。

第4小節の4分休符を挟んで5度音程の跳躍があるが、他は順次進行と3度音程の進行のみでまとまっている。和声を決定づけるバス音はほとんど左手第5指で奏でられる。伴奏型を考える際、和音の跳躍を避けるには転回形を使う工夫が必要であるが、転回形を多用しすぎ常時バス音が幹音から離れると、和声的な安定感が損なわれる度合いが増す。また、習熟度があまり高い学習者の場合、手の動きが構造上神経支配に依拠しやすい第4指、第3指を多用すると、独立して動きにくく、演奏を困難にしまうため、左手第3および第4指の反復的な動きは極力避ける配慮が必要である。

譜例の楽譜は上記の注意点に配慮し作成した簡易楽譜で、ピアノ学習初心者でも比較的短期間に両手で演奏が可能な内容になっている。

3. 簡易楽譜使用による学生への効果

前項1.1.と比較するため、上記の簡易楽譜を作成後、7月と同様に初級から中級、上級の演奏レベ

図譜例3. 第1学年共通教材「うみ」 簡易伴奏譜（筆者作成）

The figure shows a musical score for the song 'Umi' (海). It consists of three systems of music. Each system has a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment line (bass clef). The lyrics are in Japanese. The piano accompaniment is written in a simplified style, using a single position for the left hand. The score is for a first-year common textbook.

ルの同じ学生達に演奏させてみた。課題を出した次の週のレッスンで、上級者はもちろん中級者も全く問題なく演奏できた。初心者は概ね問題なく演奏できたが、初心者4名中1名の学生が右手のポジション移動にまだ戸惑う状態であった。しかしながら指導書に記載されているオリジナルの楽譜よりも遥かに弾きやすくなったのは明白であり、この学生も短時間の練習を追加して行うことにより、2回目のレッスン時には全く問題なく演奏できることとなった。

4. 簡易楽譜における音楽的内容の維持

河西は前項で「和声的な支えができることによって、メロディーの美しさを引き立たせ」(河西ほか2005)と述べた。確かに音楽的内容を豊かにするために、和声は重要である。演奏の際のいづれともいべき和声について、「小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽」の第3 指導計画の作成と内容の取扱いにおいて、「長調及び短調の楽曲においては、I、IV、V及びV₇などの和音を中心に指導する

こと。」(文部科学省 2008)とある。また、児童期の調性感について、「8歳ごろに調的感覚の顕著な発達が見られる。完全終止(V→Iなど)や半終止(I→Vなど)の働きをとらえられるようになるのも、このころからである。」(山下ほか 2011)とある。この機能と声に対する感覚が著しく発達する児童期の音楽教育では、調性感を豊かにさせる積極的な工夫が必要なのである。そのため簡易伴奏譜を作成するに当たり、平易な演奏を目指して音の数は削減しても、これら主要3和音の機能や進行を正しく扱わなくてはならないのである。

ではここで小学校第6学年共通教材「ふるさと」の和声進行について考察する。

下記楽譜の下部に筆者が和音記号を記した。これによると和声進行はすべて主要3和音で成り立っていることがわかる。またバス音進行でD(ドミナント)→T(トニック)の和声進行以外は跳躍音程をなるべく避けるため、和音の転回形を採用したが、第10小節2拍目のG音、および第14小節2拍目のG音を経過音として使用することにより、バス音にはなめらかな順次進行が、またバスとメロディーとの反進行の音型も形成されている。最低限の動きでは

図譜例 4. 第6学年共通教材「ふるさと」 簡易伴奏譜(筆者作成)

1. う さ ぎ お い す か の や ま こ ぶ な つ り し
2. い か に い ま し ち は し て つ つ が な し や
3. こ ろ ぎ し を は た し て い つ の ひ に か

F: I V I V₇² I¹ IV I

か の か わ ゆ め は い ま も め ぐ
と も が きん あ め は か ぜ に つ け
か え ら ん や ま は あ お き ふ る

V I V I¹ I IV



あるが、簡易伴奏ではありながら、単調にならないように考慮した点である。

まとめ

以上、教員養成系大学における、ピアノ初心者の学生に対して、演奏を平易にする工夫をどのように行うのかを、小学校音楽科歌唱共通教材を題材とした簡易伴奏譜の作成を通じて考察した。

(1) 決められた和声進行に基づき、単一ポジション内で演奏可能な伴奏型を作成することと、建造物の土台というべき低音を担う左手小指の位置を決定し記入すること、メロディーを担う右手は1フレーズ1ポジションになるよう運指を決めることにより、演奏が平易になることが明らかになった。

(2) また、学習指導要領にあるIIVVの主要3和音を中心とした指導については、簡易伴奏譜であっても音楽的な要素を十分盛り込むことができることが実証された。

一般に、ピアノはある一定以上の演奏技術を習得するには多大な時間が必要である。大学在籍中の短い期間に、授業や行事で演奏できるようになるにはあまりに時間が足りない。しかしながら上記(1)(2)が明らかになったことにより、高等教育機関で学ぶピアノ初心者であっても、卒業後すぐに教育現場で

活用できるスキルを効率よく身につけ、実践することができるのである。

今後は、演奏がし易く、且つ原曲の持つ音楽的な内容が損なわれることのない良質な簡易楽譜が数多く作成され、ピアノ初心者であっても意欲をもって音楽教育に携われる一助となることを期待したい。

参考文献

- 有本真紀・阪井恵・山下薫子(2011),『教員養成課程 小学校音楽科教育法』,教育芸術社, 8
- 大山美和子・小原光一・河西保郎, 他(2005),『小学校教員養成課程用 新訂音楽科教育法』,音楽教育研究協会, 110
- 教育出版株式会社編集局(2013),『小学音楽 おんがくのおくりもの 1 教師用指導書 伴奏編』,教育出版, 50
- 新海節・田中宏明(2015),『ほどよいレベルで弾ける 保育者のためのピアノ&童謡曲60』,圭文社, 8
- 三善晃, 他(2013),『小学音楽 おんがくのおくりもの 1』,教育出版, 24-25
- 文部科学省(2008),『小学校学習指導要領解説 音楽編』,教育芸術社, 92